

メロン類に対する着果ホルモン剤の処理効果について

近藤雄次・田中幸孝

(福岡県立園芸試験場)

KONDO, Y. and TANAKA, Y.

The Effect of Growth Regulator Treatments
for Fruit Setting of the *Cucumis melo* L.

自然条件下でのメロン類の結実は、開花期の温度条件によって基本的に支配されているが、昨今のように作型が前進して、むりな低温環境下で開花したものは、開やく不能や花粉のabotion などのために著しく結実が不安定である。メロン類の結実に対するホルモン剤の利用については、過去に2, 3の実験例があって、結実効果の存在はすでに実証されているが、果実の変形や裂果の併発などのため実用利用にはいたらなかった。筆者らは、ホルモン剤の処理濃度を中心に検討を行なった結果、商品性の低下をとまわらない処理方法について一応の結論を得たので、結果の一部を報告する。

I. 材料および方法

供試ホルモン剤の種類、処理濃度、供試作物および作型、処理時期などについては、第1, 2表に示すとおりである。ホルモン剤の処理方法は、開花当日の雌花を用い、霧吹きで、雌ざいおよび花卉の内側に、水滴になって流れない程度の量を散布した。

第1表 供試ホルモン剤の種類および処理濃度

供試ホルモン剤の種類	供試濃度 (P.P.M)						
	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区
ナフタリン醋酸	20	60	100	140	200	300	400
トマコン	125	250	500	1000	2000	4000	
トライロン	250	500	1000	2000	4000		

第2表 供試メロン類の作型および処理時期

供試作物および品種名	は種期	定植期	栽培様式	処理時期
下倉福マクワウリ	2月25日	4月5日	トンネル栽培	5月上旬
プリンスメロン	1.17	2.25	ハウス栽培	4月中旬
白室メロン	1.17	2.25	ハウス栽培	4月中旬

II. 結果および考察

ホルモン剤の処理による単為結実効果は、マクワウリでは、トライロンの500ppm区が最も高く、トマコン500ppm、ナフタリン醋酸20~60ppm区がこれに次いで高い効果を示した。プリンスメロンおよび白室メロンについては、いづれもナフタリン醋酸の200ppm区が特に高い結実率を示して、対照区を大巾に上廻った。

処理果の品質は、高い結実効果を示した上記各処理区では、対照区に比較してほとんど劣変の傾向を認めなかった。

第3表 処理花の結実率および品質

ホルモン剤の種類	処理濃度 (ppm)	結実率			変形果発生率			裂果発生率		
		マクワウリ	プリンスメロン	白室メロン	マクワウリ	プリンスメロン	白室メロン	マクワウリ	プリンスメロン	白室メロン
		%	%	%	%	%	%	%	%	%
ナフタリン醋酸	20	83	15	—	29	37	—	0	0	—
	60	80	38	—	35	31	—	0	3	—
	100	71	32	55	63	43	80	0	2	21
	140	59	59	—	67	38	—	0	5	—
	200	68	71	77	71	18	91	8	6	42
	300	70	36	—	84	24	—	32	3	—
	400	71	25	52	74	27	100	16	7	55
トマコン	125	89	0	—	24	—	—	0	—	—
	250	61	0	—	27	—	—	0	—	—
	500	90	20	17	24	—	75	2	—	26
	1000	—	—	13	—	—	88	—	—	0
	2000	—	—	29	—	—	100	—	—	0
トライロン	4000	—	—	23	—	—	83	—	—	0
	250	62	0	—	17	—	—	0	—	—
	500	92	14	28	22	—	0	2	—	100
	1000	76	29	32	40	—	50	0	—	50
	2000	—	—	20	—	—	100	—	—	67
4000	—	—	27	—	—	100	—	—	0	
対照区	79	59	39	48	28	77	0	3	34	